

月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



子どもたちの芋ほり体験（特定非営利活動法人ホームひなたぼっこ）

特集 年齢・境遇を超えた仲間づくり

- 「おかえりなさい」「ただいま」誰もがそこに ③
特定非営利活動法人ホームひなたぼっこ（宮城県岩沼市）
- お客さまもスタッフも「ゆっくりゆっくり」⑤
長町遊楽庵びすた〜り（宮城県仙台市太白区）
- 赤ちゃんから、ばあばまで 楽しい空間 ⑦
ちびぞうくらぶ（宮城県岩沼市）

☆ 専門家に聞く地域づくりのヒント
(高知県立大学 社会福祉学部 教授 田中 きよむさん)

場の力③ ⑨

大富行政区（福島県南相馬市小高区）

まじわる災害公営住宅⑦ ⑩

かどのわき町内会（宮城県石巻市）

どこでもサロン④ ⑪

アメリカンダンスラッチ（宮城県仙台市青葉区）

まちのしくみ④⑥ ⑫

支え合い活動とそのたいせつさを確かめながら（宮城県亘理町）

被災地の今◆2014年8月 広島土砂災害から① ⑭

社会福祉法人広島市安佐南区社会福祉協議会 主任 石田浩巳

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮

暮らしを支える支援員⑦ ⑯

多賀城市社会福祉協議会（宮城県多賀城市）

特 集

年齢・境遇を超えた 仲間づくり

あなたがいて、わたしがいる

「お互いを理解し合う」

一口に言っても、そんなに簡単なことではないかもしれない
それでも、無理のない範囲で時間と場所をともにすれば
わたしとあなたは似ているところがあると気づいて、仲良くなれるかもしれない
(もちろん、それでぶつかってしまうこともあるけれど)
違うところがあっても、それがわたしにはないあなたの良さだと感じられるかもしれない

年齢、境遇、さまざまなことで、わたしたちはひとくくりにはされ
とりあえず形にあてはめてみて、見えてくることもある

「同じ」になれて、分かり合えることもある

けれど、「同じ」になれないことで、はじかれてしまうこともある

「同じ」にされて、見落とされるあなたもいる

当たり前だけど、わたしたちは少しずつ違っていて

わたしがわたらしく、あなたがあなたらしくいられるように

多様なありかたを受け入れられたら

ちゃんとお互いのことを見て、思いやれたら

年齢・境遇を超えたわたしとあなたとして、出会う

そこから、ともに歩き始めよう



みんなでおいしい草餅づくり

DATA
 ひなたぼっこ事務所
 (ひなたぼっこ桑原内)
 〒989-2445 宮城県岩沼市桑原2-1-6
 TEL 0223-24-0674
 FAX 0223-24-0694

「おかえりなさい」「ただいま」誰もがそこに

◎特定非営利活動法人ホームひなたぼっこ（宮城県岩沼市）

ポイント

- 高齢者と子ども、職員、地域住民が家族のようにふれあひすごしている
- 民家のもつ家庭的な雰囲気は、自宅にいるようにくつろいで過ごすことができる
- 高齢者と子どもは親和性があり、ふれあうことで互いにいい影響がある

そこは住宅街の一角にある、見た目は少し大きな普通の二軒家。玄関に入ると、小さなかわいらしい子ども靴や歩きやすい高齢者向けの靴、フォーマルな若者の靴などが、同じところに並んでいる。玄関から廊下が左右（南北）に続いていて、左手に進むと子どもたちの朗らかな声が届く。右手に行けば高齢者たちのほつらつとした声が届く。ここでは、幼児から高齢者までが二屋根の下で過ごしている。まるで一つの家族のように。

宮城県岩沼市二本にあるその家には、高齢者の通所介護事業所「ひなたぼっこ二本」と小規模保育園「ひなたぼっこ子どもの園」が併設されている。毎朝、高齢者と子どもたちはフロアに集まり、朝の挨拶を交わしてふれあう。日中はそれぞれの生活スタイルのなかで活動しているが、そのときどきで一緒に食卓を囲んだり、外出したりして、活動をともにする機会が多く、楽しみを共有している。

道路を挟んで向かいには、障害のある子どもたちが暮らす「ひなたぼっこハーモニー」

（放課後等デイサービス・児童発達支援）がある。一軒家を改装し、庭には畑をつくらせた。そこで高齢者や子どもたちが菜園をつくったり、土遊びを楽しんでいる。ウッドデッキからはハーモニーの子どもたちも顔を出して、みんなとふれあえるよう設計されている。

このようなアットホームな事業所を運営しているのは「特定非営利活動法人ホームひなたぼっこ」である。ほかに桑原事業所では「通所介護・泊まり」を、吹上事業所では地域支援活動を行っている。また地域住民を対象にサロンを開いたり、学生の実習も受け入れたり、老若男女、世代を超えてつながる共生の場をつくっている。多世代が同じ空間を共有することにより、人とのつながりのたいせつさを知り、支え合う心が生まれ、誰もが何かの役割を担い、それぞれの生活のなかで生きいきと暮らしていけるという。

ここで子どもたちは、さいななことでも高齢者から「えらいね」と日々頭をなでてもらって育つ。「子どもがほめ



皆から「ふうママ」と親しまれている布田幸子さん

特定非営利活動法人ホームひなたぼっこ

代表理事 布田 幸子さん

「人間生きていくってことは、こうでなきゃいけないっていうことはない。いつなんどきどんなことがあるかわからない。それに対応するひなたぼっこでいたい」

られるのはなによりの教育」代表の布田幸子さんはそう力説する。「保護者会でわが子に自信を持ちなさい」と話します。すぐ暴れる？泣く？でも、暴れない、泣かないことがいいわけじゃないでしょう。それに、そういうた子には必ず違う面の良さがあります」

高齢者と接する子どもの姿には、その子の良さが垣間見えるという。せきこんだ高齢者を見た幼児は、普段の職員を真似て、背中をなでる動作を空に描くという。大きな声をあげる高齢者の姿に気づいた子どもは、「〇〇さん泣いているよ」と、心配してスタッフに伝えに来る。そうした姿を見て、「すばらしいところで仕事をしている」とスタッフは感じるといふ。子どもの感受性を豊かに育てるうち、自分たちの感受性も豊かになっていると思う。

子どもたちは思うように体が動かない高齢者の姿を間近に見て成長することで、自分と違う世代をいたわる気持ちりが自然と見につくようだ。ここを出たあと、大人になって社会福祉士や保



ひなたぼっこ二木の外観

育士の仕事に就く人たちも多い。「成長した子どもたちと仕事の場で再会することもある、うれしい」と話す布田さんは、長年この仕事を続けてきたからこそこのよこびを噛みしめている。

子どもと高齢者は親和的

「子どもも高齢者も、皆宝物です」と笑顔を浮かべる布田さん。しかし、当初このような多世代交流の場をつくらうとして活動を始めたわけではないという。

はじめ布田さんは岩沼市内の保育所で勤務していたが、しだいにもっと個々の子どもの成長や家庭の条件にあわせた保育を行いたいとの思いから、退職。1978年、自宅を開放して託児所を始

めた。それからは、母親の勤務時間にあわせて早朝や夜間にも子どもを預かったり、宿泊も受け入れたりと、柔軟に一人ひとりに対応する保育を21年間続けてきた。

そうした保育活動のなかで、出逢いがあり、気づきがあった。子どもたちと散歩に出かけたとき、公園のベンチに近所の高齢者数人が腰かけ談笑している場面に出会った。挨拶を交わし、一緒に歌ったり、おやつを分け合ったりするうち、次第にうち解け仲良くなっていた。子どもたちも高齢者も表情豊かになり、みんなで一緒にいることがとても自然な姿に感じた。

そんな交流のなかで布田さんは「子どもたちがいて、おじいちゃん、おばあちゃんも一緒にいて『おはよう』『おかえりなさい』と声をかけ合える空間、一緒にくつろげる場をつくり出せたら」と考えるようになる。多世代が支え合って、互いにいろいろなことを吸収し合えたら素敵なことだと。

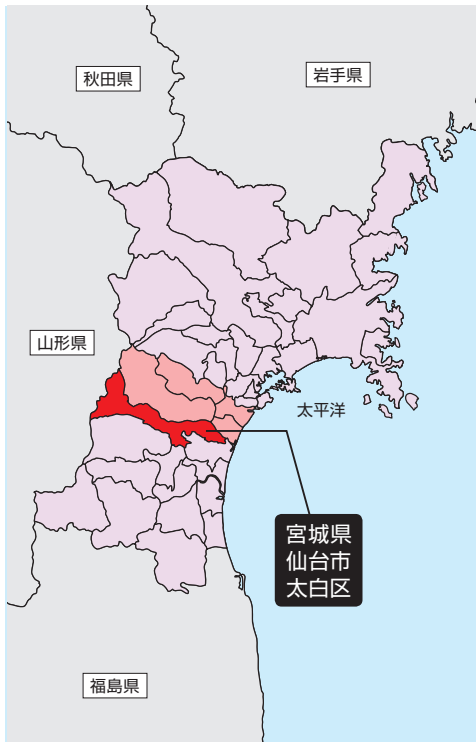
その後、1999年、桑原町内の自宅でお年寄りも一緒に「ホームひなたぼっこ」を開所する。2001年には

NPO法人の申請をし、介護保険指定事業所の承認を受けた。

介護と保育の活動を続けながら開所10周年を迎える頃、二木町内で、ある物件と巡りあう。広々とした玄関に南北に延びる部屋が特徴的なその家は、高齢者と子どもたちが過ごすのに理想的だと感じた布田さん。ここを買い取り「2007年度地域介護・施設福祉空間整備等交付金」を活用し、子ども用トイレの設置などの増改築を行った。2008年、この家は「ひなたぼっこ二木」「ひなたぼっこ子どもの園」を併設し開所。その後「ひなたぼっこハーモニー」開所など、活動を積み重ねつつ、小さな単位（小規模）の取り組みにこだわってきた。

近年、各地からの視察が絶えないひなたぼっこ。いろいろな人に多世代で過ごすひなたぼっこならではの活動をじかに見て、理解してもらっている。

環境や制度が変わっていくなか、これからも時代の流れにゆるやかに沿いながら、ささやかな日常をたいせつに活動していくだろう。田



野菜の引き売りの途中、地域の人たちと軽やかに交流する

お客さまもスタッフも「ゆっくりゆっくり」

◎長町遊楽庵びすた〜り（宮城県仙台市太白区）

ライター：熊谷智美

ポイント

- さまざまな特徴を持った人たちが、学びながらプロ意識を持って働いている
- ひとつひとつの活動が地域の人たちとの交流を育み、活動の幅を広げている

8月。基礎から改修が必要だった築120年にもなる古民家を、建築家の協力のもと、利用者らが漆喰を塗り直すなどして改装した。太い梁などに材木屋だったという当時

が運営している。オープンは2008年。外観からはわかりにくい

古民家を改修した

お洒落なレストラン

仙台市太白区の長町にある商店街に、カメのイラストが可愛い「長町遊楽庵びすた〜り」の看板がある。店の入り口は手入れされた植栽の小径の奥。ランチは魚か肉を選ぶ日替わりやパスタ、ティータイムにはケーキと飲み物、ディナーには旬の食材を使った料理とお酒が楽しめるイタリアンレストランだ。

が運営している。オープンしたばかりの古民家を、利用者らが漆喰を塗り直すなどして改装した。太い梁などに材木屋だったという当時

が運営している。オープンしたばかりの古民家を、利用者らが漆喰を塗り直すなどして改装した。太い梁などに材木屋だったという当時

の面影が残る店内は、落ち着いた雰囲気好評で、音楽会などの催しにも多く利用されている。

自立のために学びながらプロ意識を持って働く

びすた〜り代表でほつぷの森常務理事の菊田俊彦さんは、「福祉の場であるけれども、私たちはお客様を迎え入れるプロです。お客様のよるこびをたいせつにしています」と言う。知的障害や高次機能障害などがあり、就労や生活の場面でさまざまな困難を抱えたスタッフ（利用者）にとって、プロとしてお客様を迎えるプロセスは豊かであったほうがいとも話す。

長町遊楽庵びすた〜り

代表 菊田 俊彦さん

「やらない理由を探すのは簡単だけど、
やったら豊かだと思ふことに挑戦し続けています」



タッフは、目標や役割分担を明確にするための60項目のチェックシートでセルフチェックをして、職員のフィードバックを受け、できたところは加点数で評価される。レストランの業務以外にも、ビジネスマナーや履歴書の書き方の練習、企業見学などが業務時間内で行われている。

自分たちで育てた

野菜の引き売り

「長町遊楽庵びすた〜り」から歩いて10分ほどのところに、「びすた〜りフードマーケット」がある。店内には、「びすた〜りファーム」でたいせつに育てた野菜や、県内産の農産物、コロッケやパスタなどの手づくり惣菜などが並ぶ。

毎週木曜には、ファームでつくった野菜の引き売りを実施。新鮮野菜を小さなワゴンに積み込んで出かける。飲食店のほか、クリーニング店や事業所など毎週訪れるところもあれば、買い物のに



落ち着いた雰囲気「長町遊楽庵びすた〜り」

出かけるのが困難という人のところに月1回訪れてもいる。野菜を引いて歩いている最中に「寄っていった」と呼び止められて、そこで商売が始まることも珍しくない。利用者にとって地域の人たちとの交流は楽しみでもあるようだ。

病院内のカフェでも

地域の人たちとつながる

14年9月には長町病院1階にカフェ「JhO JhO (ジョジョ)」をオープンさせた。病院側の協力もあり家賃は無料となっている。その分を食材費などにあてて、手頃な値段での美味しい食事の提供を心がけているという。ちなみに魚か肉を選べる

日替わりランチは500円だ。病院に勤務している人や通院患者だけでなく、近所の人も昼ご飯を食べにやってくる。毎日通う常連客がいたり、「私たちの社員食堂」と言ってくれる近所の人もいるという。菊田さんは、「スタッフは顔なじみになっただお客様に手を振ったりしています」と笑う。接客マナーとしては正しくないかもしれないが、地域の人たちとの交流は双方に心地良い。

店内では、お客様が伝票にオーダーをチェックし、スタッフがそれを復唱して注文を取る。ご飯とおみそ汁はセルフサービス。作業の手間を省くということもあるが、お客様が食べたい量を自分でよそうことができるという利点がある。病院という環境のもと、食事の制限がある人のために計量器が置いてあるのもひと工夫だ。お客様にもスタッフにも心地良い空間づくりは、これまでのびすた〜りのあり方の延長にあるようだ。

レストランもフードマーケットもJhO JhOも、地域の人に受け入れられ、なじんでいるように見える。障害のある人たちは、できにくいことがある。びすた〜りでは、苦手なことも含めて、それぞれの特徴や個性が混じり合うことをたいせつにしている。「いろいろなスペシャリティがクロスする職場や社会が豊かなのではないのでしょうか。それを共生というのかもしれないね」と、菊田さんは言う。びすた〜りは、お客様もスタッフも職員も地域の人も「みんなが楽しめる場」を目指している。

DATA

長町遊楽庵びすた〜り

OPEN11:00 / CLOSE21:00

定休日：無し

宮城県仙台市太白区長町 3-7-1

TEL 022-352-7651

<http://www.bistari-nagamachi.com/>



赤ちゃんから、ばあばまで 楽しい空間

◎ちびぞうくらぶ(宮城県岩沼市)

ポイント

● 親子や高齢者、障害のある人が一緒に過ごす楽しさ!

朝9時半過ぎ。岩沼市里の杜地区集会所に、徐々に親子が集まってくる。「おはよう」と声をかけ合い、元気に返事をする子もいれば、はにかむ子もいて、十人十色。

10時になると、手遊び歌や絵本の読み聞かせが始まり、その後は親子で自由にプログラムを過ごす。この日は、集会所の庭に羊が2頭やってきてふれあつたり、室内で羊毛を使ったマスコットづくりのワークショップが行われたり、クラリネットの演奏会もあつて、盛りだくさんの内容。おもちゃに熱中する子もいれば、廊下を走る子もいて、スタッフがやさしく見守る。ボランティアや地元サロンの「じいじばあばの会」のメンバーが、赤ちゃんを見守ってくれるので、ママは一息。子育て談議に花が咲くことも。

11時半になると、市の障がい者地域就労支援センター「ひまわりホーム」から障害のある人たちが訪れ、自分たちの手で栽培した野菜の販売が始まる。「採れたてで新鮮」「おい

多様な人が交わる場

しい」と好評だ。

0〜3歳の子どもとママが月2回集って遊ぶ「ちびぞうくらぶ」は、乳幼児の親子の孤立を防ぎ、同世代の交流を深めるサークルとして、2015年4月に発足。岩沼市の集会所を拠点に、石けんづくりや芋掘り、消防署見学など、家庭ではできない趣向を凝らした企画で約2時間を過ごす。

兄弟で参加する子どもにとっては、赤ちゃんを見守るボランティアがいるため、上の子が安心してママを独り占めできる時間にもなっている。大学生がボランティアで来たり、「ひまわりホー



立ち上げメンバーの4人

代表の三浦未穂さんは、保育士資格をもち、3児の母でもある。市が実施してきた遊び場が終了したことを受け、そこを利用していたママ友と、「こういう場所がほしいよね」と意気投合。佐藤智美さん、猪狩あゆみさん、毛利ひろ子さんとともに、代わりとなる親子の居場所づくりを始めた。場所の確保やプログラムづくりを手探りで進めるなか、口コミで参加者が増え、いまでは平均25組の親子が参加する大所帯に。年

周囲の理解と協働

「ム」のメンバーと過ごすなど、多様な人が交わる場に発展してきた。



ひまわりホームの野菜販売は毎回盛況

間入金金3000円、参加費は1回1000円で、現在の登録者は50組。当日予約なしで参加してもOKで、見学も受け付けている。運営資金として、生協の助成金も活用しているが、講師への謝金などのやりくりは苦慮している。でも今日のプログラムは、「みなさんボランティアで来てくださった」と笑顔。楽しい時間を過ごしたい！という思いが、周囲の理解と協働を生み出しているようだ。それは年齢も、障害の有無も関係ない。「なんでもあり」の雰囲気、ちびぞうくらぶの魅力といえる。

小

DATA

ちびぞうくらぶ

TEL 090-1069-5898 (代表 三浦さん)

<今後の予定>

12月5日(火) 手づくり石けんアート

12月19日(火) クリスマス会

1月9日(火) ヨガ

1月23日(火) みんなで豆まき

※時間はすべて10:00-11:30、里の杜地区集会所にて

専門家に聞く地域づくりのヒント

共育・共感・共生と住民主体の支事・至事・地域づくり



高知県立大学 社会福祉学部 教授

田中 きよむ (たなか・きよむ) さん

京都大学大学院博士後期課程単位取得後、高知大学教員(講師・助教授・教授)を経て、2006年度から高知女子大学(現 高知県立大学)教授。年金、医療、介護、児童福祉、障がい者福祉、生活困窮者支援などの福祉システムが、少子高齢化や厳しい財政状況の下でも持続しうる公平な制度になるためにはどうすればよいか。そのために、各福祉システムの行財政構造を明らかにしつつ、今後の課題と方向を考える。他方で、フォーマルな福祉システムだけでなくインフォーマルな側面にも焦点を当て、住民の主体的・自発的な地域福祉力を生かした地域づくりの可能性と条件についての研究・教育を進めている。

核家族化や都市化、マンション住まいなどが進むなかで、近隣づきあいの希薄化とともに、祖父母世代から親世代への子育てに関する知恵の継承や子育て支援・相談機能が低下し、家庭の子育て力が弱まり、育児の孤立化、すなわち「孤育て」ともいべき状況が生まれる。それが、育児不安、育児ノイローゼや児童虐待につながらないためには、地域のなかで育て育ち合う「共育」とともに、実の祖父母だけではない地域の高齢世代と若年世代との「共感」を通じた地域の子育て支援力が意識的に再生されることが重要になる。

さらに、障害の有無、世代、困窮の程度、被災の程度などを越えた「共生」の関係性が地域に生まれることにより、家族的な関係性が地域のなかで拡大再生産される。家族がそのなかの子どもから高齢者まで一人ひとりを守るとともに、一人ひとりが家族全体の健康と幸せを願うような関係性が地域のなかで拡大されるとき、安心できる豊かな暮らしが実感される地域となる。そのような可能性を「ホームひなたぼっこ」や「ちびぞうくらぶ」の活動は示している。障がい者とその就労支援事業所が、地域の生活の質向上に資する取り組みを通じて、会社のように仕え

る「仕事」から、地域で共に支え合う「支事」への転換を図り、さらにその地域ならではの「至事」を生み出す。「びすた〜り」の取り組みは、障がい者が地域社会に支えられるだけでなく、社会を支える側にもなる「支事」、「至事」を志向している。

3つの事例に見られる小さな地域拠点を軸とする活動を通じて、住民の主体性や役割が発揮され、誰もがかけがえのない存在として「生活の主人公」になれる。地域における共生拠点が、子育て支援、健康づくり、見守り、相談支援、就労支援などの多機能性をもつことにより、生きいきと安心して暮らせるまち・むらづくりの活動・交流拠点になり得る。そして、地域共生の関係性が一層浸透し、「支援する人」と「支援される人」という固定的な意識や役割・関係が流動化し、互いの弱みを強みで補い合う「互酬性」が自然な形でネットワークになるとき、「ボランティア」という言葉は必要なくなり、真のコミュニティが再生される。さらに、人生の先輩世代から後輩世代へ、地域固有の歴史や文化、環境や「至事」、人間関係などが、心をつなぐ形で引き継がれるならば、次世代にとって押しつけではない真の地域愛が内発的に育まれ、コミュニティの持続性が展望されるであろう。

原発事故で避難して、
荒れてしまった田や畑。

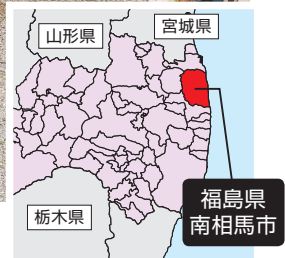
再び土を耕して、
花を育てることにした。

夏には一面花畑。

人が集まる、笑顔になる。

花の終わりの季節には、
蜜のめぐみをいただいで、
みんなで喜び分かち合う。

さあ、みんなで
蜂蜜をいこう



8月5日にヒマワリ畑を楽しむイベントが開かれた

DATA

大富行政区

福島県南相馬市小高区に39ある行政区の一つ。小高区に出されていた福島第一原発事故に伴う避難指示が2016年7月12日に解除されたのち、大富行政区でも徐々に住民の帰還が進み、17年8月末時点では14世帯約30人が暮らす。帰還者のほとんどは65歳以上の高齢者。



集落センターで採蜜作業（9月9日）



見ごろを迎えたヒマワリ畑（8月5日）



大富行政区の渡部義則区長

区長の渡部義則さん（63歳）は、「景観を美しくし、にぎわいをつくるのが目的ですが、その過程で皆で集まって作業したり、わいわい楽しく過ごすのも大事。それが住民同士のつながりを保つ」と語る。来年度以降も花畑づくりと養蜂を継続する方針。

木

花畑の整備と並行して養蜂にも挑戦。花を楽しんだあとの9月9日、同センターに住民が集まり、採蜜作業を行った。蜂蜜はガラス瓶に小分けにし、全員で分け合った。

その大富で、耕作放棄地やかつての牧草地など計約3㍍が、花畑に変わった。今年5月に住民がヒマワリやコスモスを植栽し、農地再生に取り組んだもの。ヒマワリ畑には、60㍍ほどの広さの迷路もつくられ、花が7月下旬から8月半ばにかけて見ごろを迎えると、市内外から多くの見物客が訪れた。8月5日の土曜日には、花畑を一望できる大富集落センターで、住民が来場者にジュースや切り花、新鮮な野菜などを振る舞った。

福島県南相馬市小高区の大富行政区おおとみの人口は、住民基本台帳のデータでは、72世帯205人（8月末時点）。しかし、実際に大富で暮らすのは14世帯30人ほど。原発事故に伴う避難指示が2016年7月に解除されてから、帰還した住民は約2割に留まる。



まじわる！ 集団移転 & 災害公営住宅

第27回

体操教室などで 新旧住民が交流

かどのわき町内会
(宮城県石巻市)



100人が集えるスペースを有する
門脇東復興住宅集会所



周囲にお店や病院が一軒もないなかで、自然と支え合う関係が生まれた。

13年には地域再生のきっかけをつくらうと、10数世帯の住民たちで「まねきコミュニティ」を設立。支援団体の協力で、夏から体操教室を週1回始めた。津波が来たときに日和山に逃げる体力をつけたい！というおしゃべりから生まれた体操教室は、災害公営復興住宅ができたあと毎回40人の参加がある人気ぶり。他地域に自宅を再建し、元門脇に住んでいた住民も参加する。芋煮会、昼食会、豆まきなど、まねきコミュニティの活動は地域のつながりを育み、新しい町内会に引き継がれた。

世話役の活躍

活動の世話役を務める民生委員の遠藤佳子さんと主任児童委員の平塚やい子さん、福祉協力員の阿部規子さんは、思いをこう話す。「最初は、寄贈を受けたプレハブ小屋に集まり、地元の中央地域包括支援センターの協力を得て15人で体操を始めましたが、それが楽しくて」「もともと



奥の皆さん。話をしている視察者から右から、本間英一さん、富和一郎さん、遠藤佳子さん、阿部規子さん、平塚やい子さん

門脇は、地域行事はあつたけれど、近隣のつながりは薄かった。震災で人が少なくなり、助け合わないと暮らしていかなくて関係が深まった」「災害公営復興住宅が建設されると聞いて、地域みんなで集える集会所をつくらうとほしいと要望し、実現してうれしい」「二人で家にも話さず相手がいらないから、体操教室が楽しみ」という声を聞くと、続けていこうと思うし、集うみんなのなかに思いやりが育まれていると感します」。

災害公営復興住宅の住民との交流

災害公営復興住宅は町内の東と西の2か所に、それぞれ16年11月、12月に完成した。地元出身者が多く、3分の1が一人暮らしの東住宅に對して、600m離れた場所

がバラバラで知らない者同士だったため、挨拶運動から始めて住宅内で月2回お茶つこ会を開き、徐々に顔なじみになつてきた。どちらも住宅内で自治組織をつくり、「かどのわき町内会」に班として所属する。

これらの災害公営復興住宅の入居者と一緒に活動をしていきたいと考えた遠藤さんたちは、入居開始前から、市の保健師や地域包括支援センター、市社会福祉協議会とのミーティングを主催。計4回情報交換を行い、「見守りや福祉のことを考える仲間を増やす必要がある」と、福祉協力員を3人から9人に増員して、つながりづくりを奔走してきた。「ずっと気になって声かけをしていた人が、初めて体操に参加してくれたときは、やったー！と思う」と話す平塚さん。西住宅団体会長の富和一郎さんも、「病氣やひとり暮らしの人にどうのように対応していけばいいのか、町内会の員として一緒に考えていきたい」と話す。

「人口は減つたが、住みよい地域を目指したい」という本間さんたちの思いが、少しずつ新旧住民の輪を広げている。

どごでもサロン

第4回

自然なつながりと支え合いを生み出す



ダンスとお茶飲みと一緒に

アメリカンダンスランチ

仙台市青葉区北山

カントリーやロックの音楽

に乗せて、隊列を組んだ男女が華麗にステップを踏む――

仙台市青葉区の北山市民センターで開かれるカントリー・インダンス教室「アメリカンダンスランチ・北山クラス」のメンバーたちだ。

教室を主宰するのは、カントリー・インダンスを通じて健康づくりや仲間づくりを推進する特定非営利活動法人J・PAL（本部・仙台市泉区）。

J・PALは現在、仙台市と塩竈市の13か所で教室を運営。若者から高齢者まで計約80人がレッスンを受けている。各教室の活動は月2回だが、それだけではもの足りず、複数の教室をはしごする人も。

北山クラスは、毎月第1・3週の火曜午後1時から3時まで。平日の日中とあって、メンバーは仕事や子育てが一段落した世代が中心。10月末時点では50〜70歳代の8人が通う。

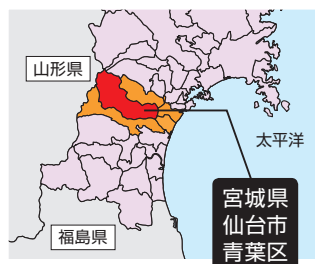
半年ほど前に同クラスに新しい始めた70歳代の女性は、「見学させてもらって一目で魅せられた。とにかくカッコイイ。まだうまく踊れないけど、すぐ

く楽しいわ」と喜ぶ。

講師でJ・PAL代表の元木節子さんは、「洋楽のロックやポップスに親しんだ世代が高齢期を迎えています。そういう人たちが楽しく自然に体を動かせるのがカントリー・インダンス。今後は、より高年齢になっても踊れるダンススタイルを開発したい」と語る。

2時間のレッスンで汗を流したあとは、トレーニング室から、給湯設備もある倶楽室に移動。講師も含め全員で「お茶飲み」をする。ダンスでほてった体をクールダウンしながら、1時間ほど世間話に花を咲かせる。飲みものやお茶うけは、メンバーが持ち寄る。

お茶飲みが始まったのは昨年4月、新人2人を迎えたことがきっかけだった。教室にすんなり溶け込めるよう、メンバーたちが相談して懇親の時間を設けた。「レッスン中はおしゃべりではできませんし、休憩時間もあまりのんびりしてはいられません。だから終わったあとにお茶飲みをすることにしました。新しい仲間が孤立してしまわなように」。ベテランの一



人がそう説明してくれた。こんな温かい気遣いが、ダンスをより美しく輝かせる。木

支え合い活動と そのたいせつさを確かめながら

宮城県亘理町



仮設住宅入居者の転居が完了し、すべての仮設住宅団地が閉鎖された宮城県亘理町。1万2199世帯、3万3834人が暮らす（2017年9月30日時点）。東日本大震災では306人が亡くなった。

町健康推進課、町社協、みやぎ心のケアセンターが集まり、それぞれの事業における取り組みを通じたすり合わせの会議を行っている。情報共有を行い、密にやり取りをしながら住民を支える。

個別の見守りやつながりづくりを応援

同町では、毎月、被災者支援連絡会議を町福祉課被災者支援班や、同課が運営する町地域包括支援センター、町健康推進課、町社会福祉協議会などが中心となって開催。また、月に2回、町地域包括支援センター、

特定延長で残っていた仮設住宅入居者への移住支援では、町福祉課の被災者支援班が中心となって転出に向けた相談対応にあたった。継続的に戸別訪問してきた町社協は、特定延長期間の頃には戸別訪問などを2週間に1回程度行ってきた。入居当初よりは落ち着いていた面もあるものの、生活の状況を伺いながら、仮設住宅に取り残されている不安感を入居者から取り除こうと努めた。



町社協の助成を受けて活動する小地域サロン

仮設住宅入居者が転居する際の引越しにかかる経費

は、住民がたてかえて支払い、それをあとから町が負担する仕組みだった。入居者は皆業者や自身の親戚などに頼んで引越し作業を済ませることができ、転居した人たちへも、町健康推進課や町地域包括支援センター、町社協、みやぎ心のケアセンターが定期的な戸別訪問やアンケート調査などを行って、生活の様子や心身の健康状態を見守っている。

たとえば、町社協は災害公営住宅入居者で、健康面に不安があったり、高齢でひとり暮らしだったりして気になる人を、現在は月に1回ほど、生活支援相談員が戸別訪問している。独居も多く、ご近所からの情報で訪問してみることもある。防災集団移転地では、仮設住宅入居時に気にかけていた人を中心に訪問している。自立再建世帯も、津波で自宅が全壊した地域に再び住み

なおす人は過疎地域で孤立しかねない状況にあり、見守りの対象となっている。生活支援相談員は、みやぎ心のケアセンターが派遣する臨床心理士と同行訪問することもある。住民のメンタルケアをサポートする町健康推進課健康推進班の班長星香さんは、「心のケアによって一人ひとりが元気に過ごしてもらい、身近なコミュニティに参加してもらいたい」と話す。コミュニティづくりを促進し、孤独死をなくすため、生活支援相談員は住民の生活に目を向け、誰が誰とつながっているか、仲間同士のお茶飲みがどれくらいの頻度で行われているかなどの把握にも努めている。他愛のない会話から情報を集め、周囲とのつながりが薄い人には個別のアプローチをとるようにする。住民同士が見守れる環境をもつていくこと、そして、それが地域生活においてたいせつなことなのだと思ってもらうきっかけをつくっていくことも目標の1つに掲げている。

食を通じて交流促進

町の食生活改善推進員は、住民が集まって一緒に調理・食事をする「おいしい輪」という栄養教室を、町健康推進課と味の素株式会社のサポートのもと開催している。仮設住宅の入居開始当初、入居者の「調理をする気が起きない」「簡単な調理を会所でしたい」という声を受け、年4回、7か所の仮設住宅団地で、推進員と入居者が一緒に季節の郷土料理などをつくって食べた。室内が見えにくい集会所でも、調理をしているとその香りが外にも広がり、通りがかりの人にも活動の様子が伝わりやすかったようだ。

地元の名物であるはらこ飯



仮設住宅で調理と食事を楽しむ「おいしい輪」

やほつき飯などをきつかけに交流も促され、笑顔があふれる同企画は好評で、だんだんと参加者が増え、仮設住宅のないいまも継続。町内4か所の地区交流センターなどで開催している。はじめは参加者に無料でふるまわれていたが、「タダ食いは嫌だ」という参加者の声で、料金をいただくようになった。郷土

料理や地域への愛着を守ることもつながっている。町社協では、災害公営住宅入居者やその周辺住民の交流の場として、2016年から「さんさんファーム」という農園を設けている（本紙58号参照）。10数人が畑に集まり、一緒に農作業をするなかで交流を深める。収穫されたものは、参加メンバー

が分け合ったり、販売して収益を肥料代などにあてている。16年には、収穫物でそば打ちや芋煮会をした。今年の夏には、子ども会とも連携し、地域の子どもとその親たちと一緒にじゃがいも掘りを実施。その翌週、収穫したじゃがいもを使い、集会所でカレーライスをつくって皆で食べた。そこに参加した子どもと大人が、別の日に偶然会って挨拶するなど、住民同士が出会うきっかけにもなったという。食を通じたふれあいが、世代を超えたつながりづくりの可能性を秘めている。

住民の支え合いにあわせた 公的サポート

町社協は、町内47組の団体が運営する小地域サロンに助成金を付与して、職員がサロンの様子を見に行ったり、参加者のなかに混ざったり、代表者の悩みを聞くなど、運営の相談にものりながらかわりをもち続ける。助成団体の自立性を妨げないよう、ゆるやかにフォローしている。

巨理町の生活支援相談員

は、入職時のオリエンテーションで被災者支援のあり方を「視覚障がい者のマラソンの伴走」にたとえて学ぶ。伴走者はコースが自分で見えないう走者に並走し、走者とながつているひもで導く。前に出て直接的に手を引っぱったり、背中を押すことはせず、本人の脚力・ペースにあわせて寄り添い、一緒に目標へ向かう。もちろん、ゴールテープを切るのは、メインの走者である地域住民だ。

町社協の復興支援コーディネーター川端康裕さんは、「ふだんは裏方として住民を支え、困ったときには『困った』と気軽に言ってもらえる存在でありたい」と話す。

住民の生活再建も進み、行政などが被災者支援から日常の生活支援に取り組みの軸を移すなかで、生活支援体制整備事業の取り組みにより、これまで被災者支援などにあたっていた町社協職員が、現在生活支援コーディネーターとして町地域包括支援センターへ出向している。生活支援コーディネーターと地域包括支援センター職員が一緒にまち歩きをし、サロン、サークル、移動

販売など、地域の集い場や支え合いの場を、見学して回ることもある。同センターの社会福祉士で町福祉課高齢者支援班副班長の條泰彦さんは、「介護保険サービスに頼り切らなくても、高齢者が地域で楽しく生活できることを実感している。ケアプランを作成する際にも生かしたい」と話す。

住民間のつながりを無視して介護保険サービスを提供しようとする、必要以上のサービスを組んだり、それまでのたいせつな支え合いを途絶えさせてしまうかもしれない。しかし、すでにあるつながりを考慮すれば、住民同士の自然な支え合いを保ち、利用者が望む地域生活を送ってもらうことができる。

住民同士の支え合いに大きな期待が寄せられるが、地域活動などにおける住民間の世話役は、次の担い手を見つげるのに苦労しているという。條さんは、「高齢者ばかりでなく、子どもや若い世代を含めて、広い世代がまじわる話し合いや協議の場づくりをしていきたい」と意気込む。清

災害が起きてしまった!?

社会福祉法人広島市安佐南区社会福祉協議会 主任 石田浩巳

2014年8月20日未明に発生した広島土砂災害から3年が経過しました。広島市安佐北区や安佐南区等

を中心にして74人（発生当時）の方が亡くなれば、局地的な短時間による雨量により、土石流が発生し多大な被害もたらしました。私は当時、広島市安佐北区社会福祉協議会に勤務していましたが、安佐北区の大林地区、三入地区、可部地区等では家屋被害も多くありました。

夜明けとともに交通渋滞が発生し、被害の大きかった地域の方々は自らスコップを手に取り、生活道路の確保のため土砂を取り除かれています。被災状況把握のため、安佐北区社協の三村事務局長（当時）と車で向かい、状況を把握して

災害ボランティアセンターの設置へ動きました。

全国各地で百年に一度と言われる災害が起き、社協職員として他地域に応援で行かせていただくことはありましたが、まさか自分の地域で発災するとは思っていません。何から手をつけていいのか：災害ボランティアセンターマニュアルを手にとって、改めて確認していきま

した。そのとき、安佐北区社協事務所に見慣れた方が駆けつけてくれました。地域で高齢者支援をされているNPO法人縁が和の國松浩司さんです。安佐北区で被災者への生活支援に取り組むきっかけをつくられた方です。國松さんとは、地域のまちづくりイベントなどで

にも動き、呑み二ヶーションもあり、いろいろな場面で相互関係にありました。

8月22日に災害ボランティアセンターが発足。総務班やニーズ班等いくつかの班ができ、発生から1週間後には

ひっそりと、生活支援チームが加えられました。このチームは、共同募金災害支援プロジェクト（支援P）で入られていた李仁鉄さんと相談したと國松さんは話します。國松さんは、運営するデイサービスを通じて被災地区の利用者の様子を把握しており、避難所に避難されている方が自宅に帰り始めていないことや、自宅から出ていない人もいることから、そのような人たちへの支援が必要ではないかと考えたのです。ちょうどその時期、日

本財団の協力のもと、大阪府のNPO法人み・らいずが長期支援に入っていただけることになり、一緒に生活支援に取り組むことになりました。

具体的には、2人1組による戸別訪問を実施。活動を始めるにあたり、あまり専門職的に行うのではなく、住民とコミュニケーションを取りながら、ちょっとした課題を引き出していこうと申し合わせました。ボランティアとして、看護職や介護職の現役やOB、大学生、高校生、民生・児童委員、弁護士などにご協力いただけることになりました。

次号では、実際に生活支援を行って見えたこと、気づかされたことをお伝えしたいと思います。



石田 浩巳（いしだ・ひろみ）

1972年山口県生まれ。小学生2年生のときに父親の転勤で広島に引っ越す。1994年6月より財団法人広島勤労者職業福祉センター（広島サンプラザ）で勤務、スポーツ関係、文化関係等多方面の方々と関係を築く。2004年に広島市社会福祉協議会に転籍。西区や安佐北区社会福祉協議会等を経て、2017年4月より現職。

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ

サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

「M・ムーアの世界侵略のススメ」

「マイケル・ムーアの世界侵略のススメ」——いきなり過激な映画の表題で失礼。この映画監督、毒をまき散らす、ケンカ腰の態度で知られる御仁（誰ですか？私と一緒にしないでください）。けれど、このドキュメンタリー作品では控えめな態度で、時には巨体を小さく(?)していました。米国のアメリカン・ドリームは何処へ行ったのか。アメリカン・ドリームを咀嚼して生活のなかで根付かせている世界各国を行脚する映画です。

たとえば、フランス料理のフルコースを出すフランスの学校給食（フランスだから当然??）。地元の食材を活かしたメニューで、高級レストラン顔負けの料理。昔のまぜい給食のイメージしかない私には、まったく信じられない光景。監督が子どもに缶コーラを飲むように促しても、手に取らない。逆に、アメリカのファストフードの昼食光景を見て、ゲテモノ食いをしているのかと心配そうな表情をしている子どもたち。食文化を学校給食で伝えるフランスに、監督は完敗でした。

日本の給食で懐石料理でも出したら、食事マナーも覚えるし、味覚も高まると思うのは私だけか？昔の給食時に「脱脂粉乳」があった。栄養はあったのかもしれないが、不味かった。おかげで、牛乳嫌いがしばらく続いた。

いまは格差社会になってしまいました。日本の社会は、高級レストラン、料亭で美食を楽しむ一方で、子ども食堂が存在していることを思うとき、フランスの給食からの学びは多すぎる。このような給食が日本でもできるのであれば、税金を取られるのも仕方がない?!

この映画では、昼休みに2時間もかけて自宅で家族と一緒にとるイタリアの昼食風景も紹介。さすが怠け者のイタリアと感嘆したが、プレミアムフライデーが空手形になっている日本では、勤勉さは美德だけど、正直イタリアが羨ましかった。

ほかに、宿題のないフィンランドの学校、学費が無料化されているスロベニアの大学などが登場。

アメリカン・ドリームが傾きかけている一方、社会に定着するソーシャル・インクルージョンの国。各国に社会病理はあるにしても、この姿勢は基本中の基本と言っているよう。

私たちが咀嚼してM・ムーアに一泡吹かせてみますか。その前に、世界行脚に出てみたい（けど、飛行機嫌いなので、困った…）。

ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所
アドバイザー 浜上 章



「分かち合い」

人間の心のなかには、“さまざまな人間：心：感情”が同居・存在している。仏も邪も寛容も憎しみも、温かみも卑劣さも、気高さも下劣さ卑猥さも、誰も多かれ少なかれもっている。

凶悪事件を起こす人もいれば、隣人の困りごとに家族のように親切に手を差し伸べる人もいる。他人や隣人の悲しみや困りごと、辛さを「他人ごと」として観て見ぬふりをする人もいれば、「我がごと」のように思いを馳せ、思いやり、気持ちを分かち合おうと行動に移す人もいる。

阪神・淡路大震災や東日本大震災ほか、いくつもの大規模な自然災害が発生した。そのたびに、全国から被災地の人たちを思いやり、悲しみや辛さ、困りごとを分かち合うために多くの支援の手が差し伸べられた。人の心のなかに、「いてもたってもおられない、何かをしなれば、したい」という衝動が生まれた。東日本大震災のとき、幼児がお店でお菓子を買おうとしたが思いとどまって、お菓子を戻し募金箱にお金を入れた、という記事を目にした。また、世界の貧しい国の人たちからも多くの義援金が寄せられた、という記事も見た。

そうした記事にふれると、人は無条件に感動する。人が心から感動する、というのはどんな場合、どんなときなんだろう？それは理屈ではなく、人として本来もっている心の琴線にふれたときではないか。人間はバラバラなようでも、どこかでみんなつながっている。長く地域福祉の仕事や活動に携わってきて、目指すのは、人間一人ひとりの“人を思いやる心、分かち合いの心と行動を育み、つなげること”ではなかったか？

いろいろな人間がいる、自分の心のなかにもいろいろな人間が住んでいる。人それぞれにさまざまな人生経験をして、老いていつか肉体は死を迎える。いろいろな人生経験は、“当事者性”を我がものとし、共感力を豊かにするためにあるのかもしれない。地域で困っている隣人に、各地の災害で被災された方々や貧困、暴力や内戦、戦争、避難生活、難民生活などで不自由な辛い生活を送っている人たちに、思いを寄せ、ほんの少しでも気持ちを分かち合うことができればと思う。

平成29年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

<講座6 住民主体で進める支え合いの地域づくり
兵庫県西宮市～誰もが一緒に 町中の集い場づくり>

講師：大坂 純（東北こども福祉専門学院 副学院長）

折腹 実己子（仙台市地域包括支援センター連絡協議会 会長）

上野 武利（西宮市社会福祉協議会 共生のまちづくり課 課長）

田村 幸大（鳴尾東ふれあいまちづくりの会 副理事長）

<スーパーバイザー研修>

【仙台会場①】 12月20日（水） 宮城県自治会館

講師：大坂 純（東北こども福祉専門学院 副学院長）

佐藤 幸子

（特定非営利活動法人 自閉症ピアリンクセンターここねっと 理事長）



生活支援相談員による見守り訪問の様子



暮らしを支える支援員27

住民と同じ目線で 暮らしの支援を

多賀城市社会福祉協議会
(宮城県多賀城市)



多賀城市は、2016年末までに、市内4地区に計532戸の災害公営住宅の整備を完了。今年3月には、市内の応急仮設住宅の全入居者が、災害公営住宅などへの転居を終えた。仮設住宅では隣の音が聞こえるなど、プライバシーが保たれない不満があったが、災害公営住宅に移ったあとは、「静かすぎて寂しい」、「隣にどんな人が住んでいるのかわからない」、と孤立感が高まっている声も聞かれる。

多賀城市社協復興支えあいセンターは、市から委託を受けて、市社会福祉協議会が運営。主に市内の災害公営住宅で、見守り活動、地域サロンの開催、災害公営住宅自治会活動の側面的支援や、地域を含めた個別相談に対応している。見守りは単身者すべてが対象で、アンケートの希望に応じて、戸別訪問・電話・ライフライン(電気・水道・ガスメーターの変化)確認のいずれかの形で、住民の暮らしに寄り添っている。

訪問時に住民からは、「一人暮らしが心配で、来てもらってうれしい」との声が寄せられている。「生活することの苦しさ」や「周囲とのコミュニケーションの問題」、「騒音問題」といった困りごとを打ち明けられることもある。それに対して、まず、住民の話をしっかり聞くことを大事にしている。自分の思いを口に出せることで、気持ちが楽になることもある。ただ、今後、主体性を持って生活していくためにも「ご家族にしかできないことはご家族にさせていただいて、踏み込みすぎないように」生活支援相談員は心がけている。表面

化した問題は、家族や関係機関につなぐことで対応している。生活全般の問題は市の生活支援課へ、高齢者の悩みは介護福祉課へ、設備関係の問い合わせは都市計画課へ、コミュニティ関係は地域コミュニティ課へと、それぞれつないでいる。それ以外にも、行政とは定期的に災害公営住宅関係課ミーティングを開催し、住宅と周辺地域の現状と課題について情報共有している(本紙62号参照)。社協内でも事務局と連携し、必要に応じて地域包括支援センターとも情報交換をしている。

地域サロンは、災害公営住宅4か所、津波被害のあった既存地域3か所で行われている。参加者はそれぞれ20人前後で、お茶飲みのほか、外部団体を招いて、コンサートのようなイベントも開催している。自治会長や区長、民生委員・児童委員にも協力を仰ぎ、公営住宅内のサロンも、既存地域の住民と融和的に活動を楽しんでいる。住民の楽しみ・つながりづくりに一役買っており、住民自身が準備や運営に携わるなど、少しずつ主体的な活動が育まれている。

センター長の嵯峨悦子さんは、「私たちも被災者。同じ被災者目線に立って仕事をしている」と支援への思いを、代表して話してくれた。田

DATA **社会福祉法人多賀城市社会福祉協議会**
〒985-0873 宮城県多賀城市中央2丁目1番1号
TEL.022-368-6300 FAX.022-368-7300

☆次号予告 特集「伝えるもの」

平成29年度 宮城県生活支援コーディネーター応用講座

<講座7 生活支援コーディネーターの実践交流>

【仙台会場】 11月30日(木) エスポールみやぎ

講師:大坂 純(東北こども福祉専門学院 副学院長)

高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)

志水 田鶴子(仙台白百合女子大学 人間学部 准教授)

購読者を募集しています!

「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか?

購読会員 年3,696円(年12回、送料込み)

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

◎お振込先 ●ゆうちょ銀行振替口座
口座番号:02260-9-46303
加入者名:全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、

①お届け先の住所 と ②何号からの購読申込み
を記入してください。

読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ(地域づくり)から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

毎号楽しく拝読しています。61号の「どこでもサロン」の日本舞踏教室は、私の家の近くということもあり、興味深かったです。足腰が悪くて通えなくなっても、「車に乗せてあげる」「お茶のみだけでも」と誘ってくれる仲間がいるって素晴らしいですね。皆さんの笑顔を見て、私もいつか通いたいと思いました。(Y・O 宮城県仙台市青葉区)

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください!
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737
E-mail joh@clc-japan.com

編集後記

取材に伺った多賀城市の災害公営住宅では、ミニコンサートが行われていました。「上を向いて歩こう」などのミュージシャンの演奏と歌声にあわせて、参加者も歌を口ずさみます。響くハーモニー。温かな雰囲気、心安らぐひとときでした。(田中)